



■ SPECIAL REPORT

持続可能な集住を考える

【第1回】防犯・防災の観点から

昨年2023年は、関東大震災発生から100年という節目の年であった。首都圏に未曾有の被害をもたらしたこの関東大震災は、その後の我が国の防災対策を考える出発点になったといわれている。現代の私たちは、常にこれらの大規模災害のリスクと隣り合わせで生活を営んでいるが、日々の生活の中ではそのリスクを忘れがちである。

都心部のマンションでは、賃貸や分譲といった所有形態に関わらず、隣に住んでいる人が誰なのかを知らないケースも少なくない。また、住人の入れ替わりもたびたび起こるため、誰が住人で、誰がそうでないのかの区別がつかないことも少なくない。そのような中で、もし災害が起こったらどのようにになってしまうのだろうか。地震だけでなく、毎年のように起こっている異常気象で何らかの被害を受けた時、日頃面識もない人と共助や自助の効果を発揮するのは難しい。

本レポートでは2回にわたり、住人・住民が主体となって、「自助・共助」を最大限に生かしマンション運営をしている築20年を超える分譲マンションの事例を分析し、今後ほかのマンションでも応用できる取り組みを考察する。また、これをきっかけに「集まって住むこと」の意味についても考えを深めたい。

■ 都市を考える インフラ都市論 Vol.72

特定非営利活動法人 日本水フォーラム 代表理事 竹村 公太郎

地形と気象が産んだ日本語

1月号で言及していた“異常な日本語の発声音と語彙の多さ”を、続編である4月号では、その経緯を地政学的観点から考察した内容で語る。

まず、なぜ日本語は世界的にみても極端に子音が少ない母音中心の言語であり、語彙が多い言葉なのかを、氷河期後の世界各地で発展した文明が、侵略を繰り返す歴史を刻んできたことを踏まえ、地理的に日本列島は侵略者から免れたことから考察する。

日本列島の地形が山々と海峡と河川で分断されていたが人々は、全国に張り巡らされた舟運ネットワークで各地の情報を共有していたことに言及。川の河口から上流に伸びているネットワークでは人や物だけでなく情報も運ばれていた。広重の浮世絵には当時の様子が描かれている。幕末の黒船来航のニュースも程なく各地に互版で伝えられた。

これらの地理的状況が重なり、子音が少ない母音中心の日本語は、そのために異常に語彙の多い言語として形成されていった。

2024年2月 マンション市場動向

首都圏	近畿圏
新規供給戸数 1,319戸	新規供給戸数 1,059戸
初月販売率 69.9%	初月販売率 77.1%
平均価格 7,122万円	平均価格 7,398万円
分譲㎡単価 1,084千円 [3.3㎡単価]	分譲㎡単価 1,173千円 [3.3㎡単価]

■ 変わるまち・未来に続くまち No.3

都心から1時間の通勤リゾート 「神奈川県三浦市」

～「定住」と「観光」の間、「トライアルステイ(試住)」という選択の先にある三浦市のまちづくり～

三浦市は、東京都心部からのアクセスの良さと風光明媚な地であることから、通勤リゾートとして評判だが、人口は1995年の約54,000人をピークに、2024年には約40,000人へと26%減少し高齢化率も高い。この現状に三浦市は、神奈川県が主体である半島全体の再生プロジェクト「三浦半島魅力最大化プロジェクト」と三浦市が主体である「三浦みらい創生プラン」「三浦まち・ひと・しごと創生総合戦略」を並行しスタートさせた。その一つに「定住」と「観光」の間の「試住」(トライアルステイ)というユニークなプログラムがある。一定期間(2週間から1ヵ月)三浦市で暮らしながら自分のリズムで働き、二拠点生活を体験してもらうもの。民間企業も「観光DX」を軸に取り組みを推進しており、成果が出始めている。

■ 今月の目でみるDATA

「住民基本台帳人口移動報告」

～転入超過は東京都など7都府県。

東京圏の転入超過度は緩やかに拡大～

今月は2024年1月に公表された住民基本台帳人口移動報告から、都道府県、21大都市、市区町村別の転入・転出などの移動者数とその内容について紹介する。

3大都市圏では、東京圏では28年連続の転入超過。名古屋圏では11年連続の転出超過。大阪圏では11年ぶりに転出超過から転入超過へ転じた。転入超過数の多い上位20市町村をみると東京都特別区部、次いで大阪府大阪市、神奈川県横浜市と続き、20市町村の内、東京の14市が占めた。地方において超過となったのは札幌市、明石市、仙台市、つくば市。

また、転入超過数では0～14歳は埼玉県さいたま市、15～64歳は東京都特別区部、65歳以上は北海道札幌市がそれぞれ第一位であった。若い世代の東京圏への転入超過が顕著となった。

■ 暮らしから考える HOUSING 未来予想

青森大学名誉教授・エッセイスト・ジャーナリスト 見城美枝子
築立ちの時

4月は入学、入社など、今までの場から卒業し新しい世界に進む季節。それを、鎌倉時代に作られた語源辞書、名語記の一説「すだつはそだつ」をあげ、親戚の少女の成長と、瑞宝中綬章叙勲されたエジプト考古学者の吉村作治氏のエピソードで語る。

現在の大学生の就職事情にも言及し、面接官が学生たちを選ぶ面接も、学生たちから面接官が査定されるようになった時代の変化にも触れる。